

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
なかま編集係

〒285-0025
佐倉市鍋木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ	佐倉市のストリートマガジン ...	松井弥彦	塩に想う	横山勇典
3 ページ	猫殿に完敗	鈴木伶子	感じるままに思いつくままに...	柴田伸一

『佐倉こどもかるた』完成へ

坪井 栄子

「僕、今日学校で『佐倉こどもかるた』で遊んだんだ。十一枚もとれたんだよ」

「かるたで覚えている読み札があるかい？」

「風車が目印……えーと」

「風車が目印 ふるさと広場 ぼくらが咲かせるチューリップ、だろっ？」

「えっ!? どうしてお父さんが知っているの？」

「お父さんも子どもの頃、そのかるたで遊んで佐倉の歴史や色々なことを覚えてたんだ。だから今でもすぐに思い出すことが出来るんだよ」

これはある家庭の親子の会話を想像したのですが、この様な思いが二年前にかかるたを作り始めた時、私達の理想とする出発点でした（『佐倉こどもかるた』あとがき）。

市民カレッジ十六期生のグループ「子ども留守会」は、この

度、二年に及んだ『佐倉こどもかるた』の編集全てを終了し三年目にその完成を迎えた。

私達夫婦が第二の故郷として、毎年二カ月近くを過ごしている群馬県で私は、故郷かるたの先駆けともいえる有名な『上毛かるた』を知った。

佐倉市に故郷かるたの無い事を惜しみ、私は自分なりに佐倉のかるた文を作っていた。

だから、カレッジ二年生の課題「まちづくり」は絶対これで行きたいと思ったものだ。

クラス全体でかるた作りをしたいと担任の先生に申し入れたがかなわなかった。そこでかるたに賛同のメンバーが集まり、これに当たる事となった。リーダーは、半世紀以上を過ぎた今でも『上毛かるた』をスラスラそらんじられる人だ。

皆で討議の結果、小学生対象のかるたとし、その他にかるた

それぞれの解説文と、これに関連した内容で問い掛け形式の「知っているかい？」という小文のセットで小冊子を作る事となった。

かるたに採用する項目選びから、読み札文、解説文、「知っているかい？」文、それ等の創作と編集まで全員で行い推敲に推敲を重ねてきた。絵札は分担してはがき大の紙に描き、パソコンで処理した。絵札の中に見事な切り絵のものがあるが、これは病気で亡くなられた方が残されたものだ。見る度に故人の魂が感じられる。合掌。

現在このかるた製品化の為の資金問題を中央公民館でお骨折り頂いているが、私達メンバーの出資も免れない。出資問題が予想された時、私はこのかるたを題材に原稿を書き、M新聞社主催の「わがまちPRコンクール」に応募して、幸いにも最優秀賞を頂いた。賞金は、製品化資金の足しにと寄付出来て、その甲斐があった。

(編集委員)

佐倉市の

ストリートオルガン

ストリートオルガン（以下はSO）は自動演奏楽器の一種です。ヨーロッパの国々では教会やダンスホール等に置かれた自動パイプオルガンの仲間です。移動を可能とし、街頭で演奏したためSOと呼ばれる様になりました。

SOは一八八〇年頃フランスで開発、その後ヨーロッパ各地で使われました。一九二〇年頃迄が全盛でした。今ではオランダでもSOは約二百台程度しかなく、楽器の製作者も数人しか居なくなりました。

佐倉藩は幕末のころ、老中首座となり日本の開国を進めた藩主堀田正睦の奨励により、オランダ学問を中心とした西欧医学の振興地でした。

文久二年（一八六二）幕府は初めてオランダへ留学生を派遣しますが、佐倉藩関係者

が三名加わっておりしました。

市は、昭和六十二年（一九八七）春、佐倉日蘭協会を設立し、オランダをより理解する事業を行なっています。同年秋、佐倉市民音楽ホールではヨーロッパで最大のオランダ国立自動楽器博物館所蔵の各種自動楽器展が開催されました。この展示は大好評で、「一台でも良いから佐倉へ」という多くの人々の要望に答え、SOを購入することにしました。

市はオランダ大使館の協力により、昭和六十三年特別注文の中型「さくら」を購入し、平成元年には市制三十五周年と日蘭修好三百八十年周年を記念して、千葉銀行から小型「ヴェーニンゲン」が寄贈されました。更に同年約百年前に製作された貴重な「サーター」を購入し、三台のSOが佐倉市に揃い普段は市民音楽ホールに展示されております。

（並木町 松井弥彦）

塩に想う

中央公民館へ向う通りの店先に「塩」という白いホウロウの小看板をみつけました。そして故郷での子供の頃、塩を買いにやらされた店先にも難しい字の「鹽」という小看板があつたことや、町通りに「塩屋小路」があつたことなどを思い出しました。

戦後の食糧難の中で白い塩は貴重品で、岩塩が配給されていたこともありました。又子供の頃、山や川へ遊びに行く時は塩を少し紙に包んで持って行き、おやつに山菜のいたどりや野菜をとって塩をつけて食べていました。

塩は今スーパーなどで自由に買えますが、つい十三年前までは専売品だったのでした。

昭和四十七年（一九七二）から仕事で浜金谷へ通っていました。その金谷神社に「鉄尊さま」が祀られていて、それが調査研究で正倉院文書天平九年（七三七）に記録さ

れている、日本最古の「煎塩鉄釜」と分かったのです。

山口県にあつたものが朝命により、特殊漂海漁民小集団が長年月をかけて運んで来たというもので、ここで作られた結晶塩は天皇の関東遠征軍兵士の士気高揚のために供され、食されていたといえます。

この鉄釜は一二〇〇年頃の近海大地震で岬が全壊したため行先不明となり、文明元年（四六九）に浜辺へ打上げられ神社に祀られました。それが江戸時代の学者により伝承が無視されて違うものになり、二〇〇年程たつて煎塩釜に蘇ったのでした。

このように関東初の製塩が浜金谷の地で行われていたのでした（千葉県指定文化財）。歴史上でも謙信が宿敵信玄に塩を送ったなど、時々塩の姿がみつけられます。

（井野 横山勇典）

猫殿に完敗

我家の狭い庭には、天気の良い日は必ずといつていいほど黒猫、白黒のまだら模様の猫殿の訪問者がある。

ベランダでの日向ぼっこ、昼寝、時には、三つ巴になりニャオー、ギャオー、ウギャオーと威勢のいい唸り声を発しながらの応戦。

来客があるのはいいのだが、悩みは一つ、殿たちの糞の始末だ。違和感を持ち、サンダルの裏を見ると、べつとりとご馳走がついていることが度度あり、猫よけの薬をまいたりしたが、その効果は、今のところ皆無。

ついこの間は、かわいい首輪のついた黒猫ちゃんの排便現場に遭遇。

「そこでしては、駄目ですよ。駄目だよ」と、繰り返して猫を凝視しながら論すと、彼もまた私を凝視しながら、かわいい足で土かけを

繰り返して、異物が見えなくなるまでの完璧な跡始末をし、ゆつたりとした足どりで家路についていくではないか。何と仕付けの行き届いた猫殿かと怒りを通り越し、感服しきり。

事の成りゆきを主人に話すと、何と甘く見られたことかきつと今後も勝手知ったる家、安心して自分の生活習慣を維持していくことであろうとのこと。

願わくは、自宅で排便し、日向ぼっこや散歩程度に止めてほしいと切望する次第である。

数年前、我家の玄関前で犬の散歩中の粗相現場を目撃、この時は、見知らぬご婦人の「あとから片づけに来ます」の言葉があったものの未だに現れず、驚異を感じている。黒猫ちゃんを手本にと願う。

(宮前 鈴木伶子)



感じるままに 思いつくままに

日記帳に収まりきらない感想や自分の考えを、宛名のない手紙風に取り留めもなく綴ってゆきました。

二〇一〇年五月十八日
今日は晴れてドライで気持ちの良い日ですね。昨日は久しぶりに俳句が出来ました。

午後の三時あたりから、裏庭の雑草取りを始めました。草取りに集中したのが、草取り鎌のサクク、サククという音しか聞こえず、時間がいつの間にか過ぎてゆきました。

草むしり

時は静かに流れけり
二〇一〇年五月十九日
昨夜来の風が朝になっても治まらず強く吹いていますね。お元気でしょうか。

昨日は大人の塗り絵教室に行きました。課題であるスーラの『日曜日』のポール・アン・ベサン』の点描画の模写

を提出する日です。やつつけ仕事で仕上げてきました。教室で他の方の作品と並べ鑑賞しました。女性の方の作品は丁寧で出来るだけ課題に近付ける努力の跡が窺える一方、私のものは力強いタッチで、対照的で面白いという先生のコメントでした。私のものはただ荒っぽいだけで、先生もコメントに苦労されたのでしよう。もう一年半近く習っています。もう一年半近く習っています。もう一年半近く習っています。

今日はいまさらから駒場東大前にある「日本民藝館」の朝鮮陶磁展を見に行きます。大変楽しみにしていました。

朝鮮の陶磁に魅入られたのは、もう十年以上も前になるかもしれませんが、大阪市立東洋陶磁美術館に展示されていた李朝の白磁の壺に出会ってからです。今回の感想は後日、お伝えいたします。

(稲荷台 柴田伸一)

9月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

むくら道

今年、土井利勝が佐倉に入府してから四百年になります。佐倉城は入府八年後に完成したと言われています。

城のイメージとして弧を描く石垣と白垂の天守ですが、佐倉城には石垣がありません。城という文字が土偏に成ると書くように、土を盛り上げ、掘り下げて作られています。

それでも、主要な建物の礎石として、石が使われました。今

でもこの石が百個ほど城址公園内に積み上げられています。一個が直径八十cm、高さ四十cmで、重さは四百五十kg程あります。この石は銚子石と言われる物で、銚子近辺から常陸川（現在の利根川）を経て、印旛沼に石釣舟で運ばれました。その後、人力により水面から二十五mの高さの城に運んだのです。

石を見ながら往時の印旛沼の水運と人々の汗に想いをはせました。

（横山詔正）

あとがき

毎日、猛烈な暑さが続いています。温暖化の影響と言われていますが、本当に地球はどうなつちやうの？

『なかま』編集委員として、皆さまからの投稿文を読ませていただくようになって二年余になります。毎号、必ずと言って良いほど佐倉の歴史に触れることができ、勉強になります。

個人的な感想で恐縮ですが、

古い時代の佐倉の歴史だけでなく、戦中・戦後の出来事や投稿者の体験談には、佐倉の歴史と言うより、その人の歴史を感じて感動します。また、投稿された方々の博識と、文才に感心するばかりです。これからも感動的な話を心待ちにしています。

この号が発行される頃、暑さもやわらいでいることを願っています。

（猪瀬信彦）